



Title	王兵作品研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	朱, 偉
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15212号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87167
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Wei_Zhu_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：朱 偉

学位論文題名 王兵作品研究

・本論文の観点と方法

本論文は、現代中国インデペンデント・ドキュメンタリーを語るうえで欠かせない映画監督、王兵の作家性を総合的に考察するモノグラフである。フランス、日本をはじめとする国際映画界で高く評価されている王兵は、一貫して体制から独立して映画作品を制作し、中国現代史の重大な事件をめぐる証言や、激変する現代中国社会における現実の諸相を記録し続ける稀有なシネアストである。本論文は、王兵の主要作品を時系列的に考察することを通して、この映画作家の芸術的特異性を明らかにしようと試みる。論文は各作品論を行なうにあたって、歴史上の事象や現代中国社会の状況といったコンテクストへの関連付けも意識しているが、考察の重点をあくまで映画表現そのものに置き、映画作品の内在的な側面をめぐる検討を重ねていく。

・本論文の内容

本論文は序章とそれにつづく八つの章から構成されている。

序章はまず王兵のこれまでの映画・映像作品を、歴史的・社会的事件の記録と表象、歴史の記憶の一形態である証言の記録、現代中国社会における「下層」民の表象、ビデオ・アート群——以上四つのカテゴリーに分類し、そのフィルモグラフィを整理する。つぎに、海外と中国国内における王兵作品の受容および評価を概観し、主題の一貫性、時間の表象、デジタルカメラの使用、現代中国ドキュメンタリー映画の流れとの関わり、証言、弱者といった、王兵作品の特徴をなす諸事項にも言及して、論文のアプローチと全体の構成を提示する。

第一章・第二章は映画作家王兵の名が世界的に認知されるきっかけとなった九時間超に及ぶドキュメンタリー、『鉄西区』に関する考察を行なう。第一章では、多く語られてきた本作について、とりわけ「廃墟」の表象に拘りつつ検討する。計画経済から市場経済へと変動する過程で再編を余儀なくされるかつて国有大企業だった巨大な組織が、どのように解体され、それに伴って職員たちが所属企業を失わざるを得ない状況に追い込

まれ、その家族たちもどのように人生の大きな変化を蒙るかという現実を、史的使命をもってフィルムに収めようとする王兵の本作では、生々しい人間生存の実態が提示されている。本論文は、作中におけるそういった実態から、栄えていた工業の町が「廢墟」になりつつある過程を捉える映像の「重さ」、「中途性」を強調する。また、激変する現代中国社会において町全体が取り壊され、このことによって普通の人々の生の内実が急変するといったテーマに関心を示してきた賈樟柯監督の作品との比較も試みられている。第二章では、作中の事象を捉えるカメラの態度、言い換えれば、カメラを操縦する映画作家王兵の、被写体に対する倫理が議論される。労働者である被写体たる人物が何かを掘る局面があるが、映画作家である王兵も、人物を執拗に追いながら、普通の人々の生存状態の各「層」をカメラで「掘」り、独自の触感を獲得していると論文は示唆する。

第三章・四章は、『鳳鳴——中国の記憶』をめぐる論考に当てられる。まず第三章では、一般的に証言映画といわれる本作に関して、証言とフィクションの関係性にかかわる、真実といわれるものの曖昧さを問題にする。作中の被写体、歴史事件の経験者である鳳鳴は、王兵のカメラを前にして過去の経験を語る以前に、すでに『経歴 私の1957』という自伝本を著していた。本章は、映像のなかで鳳鳴が語った内容と彼女が自伝で綴る言葉とを相互検証しながら、両者の異同を確認し、このことによって、映像作品における鳳鳴の「証言」に文学的修辭が入り混じっていることを指摘する。第四章では、ロベール・ブレッソンによる映像の「貧しさ」への称揚を援用し、上海をテーマとする賈樟柯のドキュメンタリー映画『海上传奇』におけるインタビュー場面と比較しつつ、『鳳鳴——中国の記憶』に見られる映像表現面の特徴的な点について考察する。

第五章は、先行研究で検討されることの少ない『名前のない男』についての作品論に当てられる。名前がないだけでなく、家族もなく、「前世」も知られず、ただ一人で洞穴に居を構え日々を送る男の農作業や暮らしを執拗に追いつける本作に関して、本章は時間・空間の表象、人物の捉え方、風景の表象など、表現の諸要素をそれぞれ点検する。具体的な画面分析を通して、本章は画面の「美」を意図的に損なう「中途性」に向けられた監督の芸術的意志を析出する。中国第五世代映画の代表作のひとつである、陳凱歌監督の『黄色い大地』における黄土の表象との比較も、『名前のない男』論の裏付けとして行なわれている。

第六章は、ドキュメンタリー映画作家である王兵の唯一の長編劇映画『無言歌』をめぐる考察である。1950年代に起きた歴史的な事件をテーマとする本作を議論するに際し、

本章は当該事件の経緯、事件の背景にあった政治運動、楊顕恵による原作小説、2000年代に入ってから活発になった、本事件をめぐる記録・反省を促す中国国内における一部の動き、本作を制作する監督の動機など、複数の事実関係を整理する。また、十九の短編からなる原作を映画化するに際し、王兵がどのように取舍選択したかを確認し、原作に見られる傍観者的視点による淡々とした文体が受け継がれていることを指摘する。さらには、監督本人が語った創作経緯、および一部の先行研究の知見に準拠しつつ、作中における光の処理も検討する。最後に、本作全体にかかわるドキュメンタリー／フィクション、廢墟／聖地、人間／動物、肉体／精神といった二項対立に言及し、二項の境界上の変異点こそを把握できたと結論付ける。

第七章は証言映画の超大作『死靈魂』を対象とする考察である。『鳳鳴——中国の記憶』と『無言歌』が取り扱ったテーマを受け継ぎ、二十二人の当事者・関係者の証言を採集する本作の全体的構造を確認したうえで、本章は画面内被写体の空間への監督本人の闖入、美術出身の監督がインタビューの当事者をカメラに収める際に見られる、肖像画を思わせるタッチ、半世紀前に起きた事件の現場の現在を撮る場面における土地の表象の特殊性などを順次取り上げていく。最後には、証言映画としての本作において、構成や視点といった点に表現の不充分さが存することも指摘する。

第八章は、王兵作品に共通する幾つかの表現上の特徴的な事項を総括的に検討する。王兵は作品を制作する過程で、デジタルカメラの利便性を活かし、過剰なまでに大量な映像素材を撮る。被写体を撮影する際には彼は「映画的」な瞬間が訪れるのを忍耐強く「待つ」。また、とりわけ『苦い銭』に顕著に現れるように、彼は作品にストーリー性を押しつけるのではなく、膨大なフッターからストーリー性を間接的に導く。さらには、人為的加工が容易になるデジタル撮影・編集を一貫して使用するも、かえってフィルム撮影におけるイメージと被写体とのインデックスに拘り、そこでデジタルカメラの自動性・機械性が駆使されるとする。

末尾の「結論」では、本研究で得られた成果をまとめ、王兵の映像作品が示す映画の可能性を記述する。